二〇一九年二月一九日（参加者一七名）

蓑を着るごとく羽立て雨の鷺　うつぎ
鴨の陣翔び立たせたるジャンブ傘　うつぎ
こだはりは樽づくりから寒造　うつぎ
酒蔵の昼なほ暗き余寒かな　たか子
蔵の外の井戸を覗けば落椿　たか子
利き酒のせいかも知れず蔵温し　たか子
残る鴨右岸左岸を疎に満に　たか子
酒蔵の黒塀に浸む春の雨　たか子
梅にほふ試飲にめぐる蔵の町　菜々
神棚に供ふ稲穂や寒造　菜々
河原石鍵盤として石たたき　菜々
堰おちて落ちて町川春奏づ　菜々
寒造蔵の要の太柱　ぽんこ
磊々の瀬に小躍りす春の水　ぽんこ
水鳥の砂嘴にコロニーなせりけり　ぽんこ
春灯下酒樽作る匠かな　はく子
杉樽のかほり床しき新酒かな　はく子
帰る鴨汐入川に集合す　はく子
汐入へ波乗りのごと鴨の群　わかば
河原はや下萌ゆ色と思ひけり　わかば
間断と蹲居を打つ春の雨　わかば
南高梅ふふむ住吉川堤　なおこ
下萌や震災鎮魂碑に祈る　なおこ
堰落つるしるき水音や春兆す　きづな
利き酒に足なとられそ春の雨　きづな
蔵窓を洩る日仄かや春浅し　よし子
杉玉の門に褪せたる蔵二月　よし子
春水の瀬石に躍る波模様　明日香
春寒や訪ひし酒蔵門閉ざす　小袖
暖かや杉の香に満つ樽工房　せいじ
鷺一羽微動だにせず春寒し　満天

定例句会みのる選

二〇一九年二月一九日（参加者一七名）